

令和 5 年度 東大阪市地域研究助成金 報告書

## 「東大阪市におけるヤングケアラー支援制度の検討」

近畿大学 総合社会学部 社会・マスメディア系専攻  
齋藤 暁子

### 1. 本研究の背景と目的

#### 1.1 研究の背景

ヤングケアラーとは、大人にかわって家族のケアを担う子どものことである。年齢や担うケアの内容は国や地域によって異なるが、日本では、こども家庭庁が「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っているこども」（こども家庭庁 2023）と定義している。ケアの内容は、病気や障害を持つ家族の世話や家事だけでなく、幼いきょうだいの世話や見守りも含まれる。こども家庭庁は年齢については明記していないが、学術研究や実態調査では、ケアラー研究の第一任者である渋谷智子やケアラーの民間支援団体である日本ケアラー連盟の定義にならい、18歳未満の子どもの指す場合が多い。

日本においてヤングケアラーは、2021年に厚生労働省による全国的な実態調査の結果が公表されることで「社会問題」として認識されるようになった。2022年には、厚生労働省が公式HPでのヤングケアラー啓発のための情報提供や各自治体へ向けた「ヤングケアラー支援体制強化事業」（ヤングケアラー実態調査・研修推進事業およびヤングケアラー支援体制構築モデル事業）を開始した（こうした活動は2024年現在、こども家庭庁に引き継がれている）。

ヤングケアラーが全国的に認知され、啓発活動が行われる一方、そのことで生じる問題点も指摘されつつある。松村（2022）は、「ヤングケアラー」と呼称することで周りの子どもとは異なる存在であると当事者に思わせる「スティグマ」になりうる危険性がある述べている。

#### 1.2 本研究の目的

以上の状況をふまえ、本研究では社会的な関心が高まるヤングケアラーについて、大規模な実態調査が行われていない東大阪市をフィールドとして、中学生・高校生を対象とした計量調査を実施することで、当該地域のヤングケアラーの実態やニーズを把握することを目的とする。さらに、調査結果から、当事者であるかれらのニーズに基づいたボトムアップの支援策を検討する。

研究の実施にあたり、近畿大学総合社会学部社会・マスメディア系専攻・齋藤ゼミナールのゼミ生（荻野このみ、織田泰地、神吉智朗、北村大、上月咲季、小林千紘、重本理桜、仲

村優治、仁科駿也、久常遙、星莉々花、宮田滉樹、西海佑) がプレテスト、および Web 調査の集計作業の一部を担当した。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査の方法と対象

調査方法は、調査ソフトウェアの **Qualtrics** を用いた **Web** アンケート調査である。2023 年 11 月～12 月に実施した。東大阪市立中学校、および市立高等学校の全校生徒を対象に「日常生活にかんするアンケート」として、学校を通じて、生徒本人へ調査回答フォームの **QR** コード、**URL** を記載した調査概要を配布し、**Web** 上（ブラウザもしくはスマートフォン）で回答・回収を行った。総回答数は中学生 1552 名、高校生 520 名であった。

### 2.2 質問項目

質問項目は、全国調査である「令和 2 年度ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書査」(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021 以下、「全国調査」)および、令和 3 年に実施された「大阪市立中学校生徒を対象としたヤングケアラー実態調査」(大阪市ら 2022 以下、「大阪市調査」)等を参考とし、東大阪市子どもすこやか部・子ども見守り相談センター・子ども相談課および東大阪市教育委員会の中学校、高等学校の担当者との複数回の協議のうえ策定した。

主な質問項目は、図表 2.1 のとおりである。

図表 2.1 質問項目

基本属性 (全員)	性別、学年、同居家族、主な収入の担い手 (※)、アルバイトの経験 (※)、
日常生活 (全員)	日常生活の満足度、健康状態、平日/休日の勉強時間、平日/休日の自由時間、欠席/遅刻の状況、部活動の有無、普段のお手伝い内容
お世話について (該当者のみ)	お世話の必要な人の種類、お世話の必要な人の状態、お世話の内容/頻度/時間、お世話の影響・評価、相談の有無、相談しない理由、必要な支援
日常生活の悩み(全員)	困っていること (自由回答)

(※)の項目は、高校生のみ質問項目を設けた

以上の調査項目に加えて調査を通じての支援の可能性を検討するため、**Web** アンケート調査の最後の画面に図表 2.2 のように、悩み相談の自治体の問い合わせ先と、匿名で相談可能な **Web** 相談窓口の **url** を記載した。

図表 2.2 Web アンケート（ブラウザ版）の支援紹介画面

### 日常生活についてのアンケート

アンケート調査にご協力いただきありがとうございました。

「話したい」「相談したい」「何かしてほしい」という場合は、下記の【相談先】まで気軽に相談してください。相談や支援を行うため、東大阪市の担当者がお話を聞かせていただきます。個人情報は守られますので、ご安心ください。

【相談先】 東大阪市子どもすこやか部 子ども見守り相談センター子ども相談課  
電話： [REDACTED] 受付時間：月～金（土日祝、年末年始は除く）  
相談フォーム（リンクをクリックすると東大阪市の相談ページが新規に開きます）  
URL [https://www.ci\[REDACTED\]](https://www.ci[REDACTED])

質問項目の内容は基本的には先行調査と比較可能な項目として実施したが、先行研究と異なる本研究の特徴的な点として、次の二点が挙げられる。

一点目が、「ヤングケアラー」という用語を調査では使用せず、認知についての質問も省略している点である。先行研究（松村 2022）で指摘された「ヤングケアラー」の「スティグマ」化の可能性を考慮し、調査の実施では「ヤングケアラー」という用語は使用せず、日常の生活行動（お手伝いやお世話）としてケアを担う子どもたちの実態の把握を試みた。

二点目が、お世話の影響・評価として、ケアを担うことの主観的な評価をネガティブな側面だけでなくポジティブな側面の選択肢を設定した点である。当事者である子ども自身がケアの影響をどのように考えているのかをより多角的にとらえるため、従来の物理的・心理的負担以外の選択肢を設定した。

### 2.3 倫理的配慮

調査の同意については、調査概要に参加や回答は任意であり、調査は途中で中断できることや、調査に参加する・しないが学校での評価に影響をしないことを説明した。また、高校生調査については、Web 調査の冒頭で同意確認を行った上、調査に合意した場合のみ回答可能とした。

なお、本調査の実施方法および個人情報の管理については、近畿大学総合社会学部研究倫理委員会の承認（5-22）を受けている。

## 3 東大阪市のヤングケアラーの実態——中高生調査の結果から——

### 3.1 回答者の特徴

まず、今回の調査者の概況として、基本属性についての回答結果を見ていこう。

男女比（図表 3.1.1）は中高ともほぼ半々であり、学年（図表 3.1.2）についても、若

千中学校で 3 年生が多めで高校生では 2 年生が少なめではあるが、大きな偏りは見られなかった。

図表 3.1.1 性別（単一回答）

	有効回答者数(n)	男性	女性	その他	合計
中学生	1523	46.5%	51.0%	2.5%	100.0%
高校生	482	50.0%	48.0%	2.0%	100.0%

図表 3.1.2 学年（単一回答）

	有効回答者数(n)	1 年生	2 年生	3 年生	合計
中学生	1487	36.9%	30.0%	33.1%	100.0%
高校生	518	36.4%	29.2%	34.4%	100.0%

同居家族については下図表 3.1.3 のとおり、中高とも母親との同居が 9 割で最も多く、次に父親（中学 8 割、高校 7 割）、きょうだい 4 割から 5 割である。祖父母との同居は 1 割程度と低い。

図表 3.1.3 同居家族（複数回答）

	有効回答者数	父親	母親	兄、姉	弟、妹	祖父母	その他
中学生	1552	86.1%	95.4%	48.4%	47.5%	10.0%	4.9%
高校生	518	75.9%	91.1%	50.2%	41.1%	12.7%	5.0%

祖父母を別々に計上しているので調査項目は若干異なるが、図表 3.1.4 の全国調査（三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021）と比較すると、概ね同じような傾向といえる。

図表 3.1.4 同居家族全国調査の結果（複数回答）

	(n) 調査数	母親	父親	祖母	祖父	兄・姉	弟・妹	その他	無回答
中学2年生	5,558	97.5	85.4	16.5	10.9	43.7	50.7	1.9	0.3
全日制高校2年生	7,407	95.5	81.3	20.8	13.4	36.9	50.5	3.0	0.2
定時制高校2年生相当	366	94.3	72.7	18.6	10.7	39.1	48.1	3.8	0.3
通信制高校生	446	85.9	65.0	21.5	13.0	32.3	42.8	11.0	0.9

※通信制高校生は、「その他」に「一緒に住んでいる家族はいない（友達等との同居、寮生活等を含む）」を含めている。

出典 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021 『ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書』

### 3.2 日常生活について

ここでは、日常生活についての主な結果を確認していく。

主観的な生活満足度は、図表 3.2.1 のとおり中学生は「満足している」(43.1%)と「どちらかといえば満足している」(44.5%)で満足している層が全体の 9 割弱を占めている。高校生についても「満足している」(31.7%)と「どちらかといえば満足している」(55.2%)で、「満足している」の割合は中学生よりも低い、満足している層が 8 割と高い。

図表 3.2.1 普段の生活の満足度 (単一回答)

	有効回答数	満足している	どちらかといえば満足している	どちらかといえば不満である	不満である	合計
中学生	1365	43.1%	44.5%	9.2%	3.2%	100.0%
高校生	496	31.7%	55.2%	10.9%	2.2%	100.0%

自分の健康についての主観的評価は、図表 3.2.2 のとおり中学生では「とてもよい」(37.2%)が最も多く、次に「ふつう」(29.4%)と「どちらかというといよい」(25.5%)となっており、「あまりよくない」や「よくない」など健康に不安を覚えている層は 1 割に満たない。高校生では「ふつう」(38.4%)が最も多く、次いで「どちらかといえばよい」(27.5%)と「とてもよい」(26.9%)と同程度となっている。中学生と同様に、健康に不安を覚えている層は 1 割に満たない。

図表 3.2.2 健康状態についての評価 (単一回答)

	有効回答数	とてもよい	どちらかというといよい	ふつう	あまりよくない	よくない	合計
中学生	1365	37.2%	25.5%	29.4%	6.4%	1.5%	100.0%
高校生	498	26.9%	27.5%	38.4%	6.2%	1.0%	100.0%

「ヤングケアラーアセスメントツール」の質問内容を基に、全員を対象に健康状態などの困りごとについて具体的な悩みをたずねた結果が図表 3.2.3 である。

その結果、3.2.2 では中高生とも健康に不安を覚えている層は 1 割に満たなかったが、「当てはまるものはない」が中学生 34.7%と高校生 18.8%に留まる一方で、「ストレスを感じる」(中学生 33.5%、高校生 27.2%)が中高生とも 3 割近くおり、「十分に睡眠が取れない」が中学生で 21.8%いた。

図表 3.2.3 健康状態などで困っていること（複数回答）

回答数		身体に		ひとりぼ	泣きたくな	自分のこと	十分に	食欲が	その他	当てはま	
		具合が	ストレ								
中学生	1552	17.8%	33.5%	8.2%	12.9%	5.5%	21.8%	12.1%	4.8%	2.3%	34.7%
高校生	511	12.0%	27.2%	4.5%	8.0%	2.4%	15.3%	8.8%	2.2%	0.8%	18.8%

自由回答の日常生活での悩みについては、中学生で 131（総回答数 1552 名の 8.4%）、高校で 23（総回答数 520 名の 4.4%）の回答があった。主な内容は、学校への不満や教員の問題、勉強や将来の不安、友人や家族との人間関係の問題である。自由回答の中には家族からの暴力や、家族のケアのために睡眠が取れていないなど深刻な問題も書かれていたが、調査期間中に Web アンケート調査に記載した相談窓口を利用する対象者はいなかった。

### 3.3 ケアをしている子どもたちの実態

ここからは、ヤングケアラーと想定される子どもたちの生活実態についてみていく。本調査では、「家族にお世話が必要な人がいる」と回答したのは、中学生で 137 名、高校生で 35 名であった。このうち、実際に「介護、手伝い、精神的サポートなど」のお世話をしていると回答した中学生は 97 名（総回答数 1552 名の 6.3%）で、お世話を「家族と一緒にしている」が 88 名だったが、「ひとりでしている」人も 9 名いた。お世話をしている高校生は 23 名（総回答数 520 名の 4.4%）で「家族と一緒にしている」が 22 名、「ひとりでしている」が 1 名であった。この東大阪市の結果は、全国調査（三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021）のヤングケアラーの割合（中学 2 年生の 5.7%、高校 2 年生の 4.1%）よりも若干高い。

お世話が必要な人の属性としては、中学校も高校も最も多いのは祖父母中学校が 32.8%、高校が 40%で、次に幼いきょうだいが 31.4%と 34.3%とこの二つが主なものとなっていた。

図表 3.3.1 お世話の必要な家族(複数回答)

	回答者数	父親	母親	祖父母	兄・姉	弟・妹	その他
中学生	137	10.9%	13.1%	32.8%	10.9%	31.4%	16.1%
高校生	35	8.6%	14.3%	40.0%	8.6%	34.3%	5.7%

ヤングケアラーの定義が異なるため厳密な比較はできない点は留意が必要だが、全国調査の結果（図表 3.3.2）と比較すると、東大阪市の場合は祖父母の割合が高い。

図表 3.3.2 世話を必要としている家族（複数回答）

	(n)	父母	祖父母	きょうだい	その他	無回答
中学2年生	319	23.5	14.7	61.8	3.8	9.4
全日制高校2年生	307	29.6	22.5	44.3	5.5	8.8
定時制高校2年生相当	31	35.5	16.1	41.9	12.9	9.7
通信制高校生	49	32.7	22.4	42.9	12.2	0.0

※通信制高校生は「18歳以下」と「19歳以上」の合計

出典 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021 『ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書』

次に実際にどの程度お世話を行っているのかについて確認する。図表 3.3.3 のとおり中高生がお世話をしている時間は、中学生は「1時間未満」が 57.8%と 6 割近くを占めており、次に多いのが「1時間以上2時間未満」（14.4%）で、2時間未満で全体の 7 割を占める。高校生も中学生同様「1時間未満」（42.9%）が最も多く、次に「1時間以上2時間未満」（38.1%）で2時間未満が 8 割を占めるが、年齢のためか中学生よりも1時間以上世話している人の割合が多かった。

また、図表 3.3.4 のお世話の頻度は、中学生高校生とも「毎日」が最も多く、中学生 36.2%、高校生 33.3%と、3 割の子どもたちが毎日ケアを行っていた。

図表 3.3.3 お世話をしている時間（単一回答）

	有効回答者数	1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上4時間未満	4時間以上6時間未満	6時間以上8時間未満	8時間以上	その他	合計
中学生	90	57.8%	14.4%	4.5%	8.9%	3.3%	3.3%	7.8%	100.0%
高校生	21	42.9%	38.0%	4.8%	9.5%	0.0%	4.8%	0.0%	100.0%

図表 3.3.4 お世話の頻度（単一回答）

	有効回答数	1年に数日	1ヶ月に数日	週に2,3日	週に4,5日	毎日	その他	合計
中学生	94	6.4%	11.7%	22.3%	10.6%	36.2%	12.8%	100.0%
高校生	21	0.0%	19.0%	19.0%	19.0%	33.4%	9.6%	100.0%

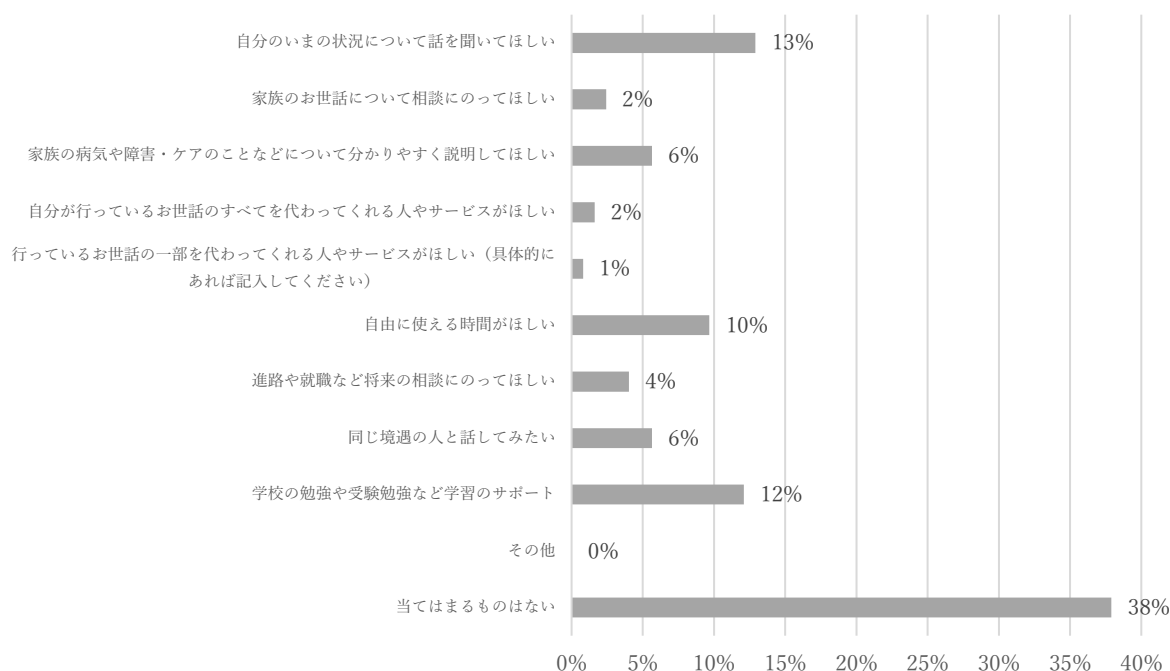
最後に、必要な支援についての結果をみていこう。

中学生の結果（図表 3.3.5）では、必要な支援について、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」（13%）や「学校の勉強や受験勉強などの学習のサポート」（12%）など本人への直接的なサポートが求められていた。一方で、すべての項目の中で「当てはまるものがない」が 38%と最も多かった。

高校生の結果（図表 3.3.6）では、「自由な時間が欲しい」（8%）が最も多く、「学校の勉強や受験勉強などの学習のサポート」（6%）・「進路や就職など将来の相談にのってほしい」（6%）が続くが、全体として中学生よりも項目を挙げている割合が低く、「当てはまるものがない」（42%）が最も多かった。

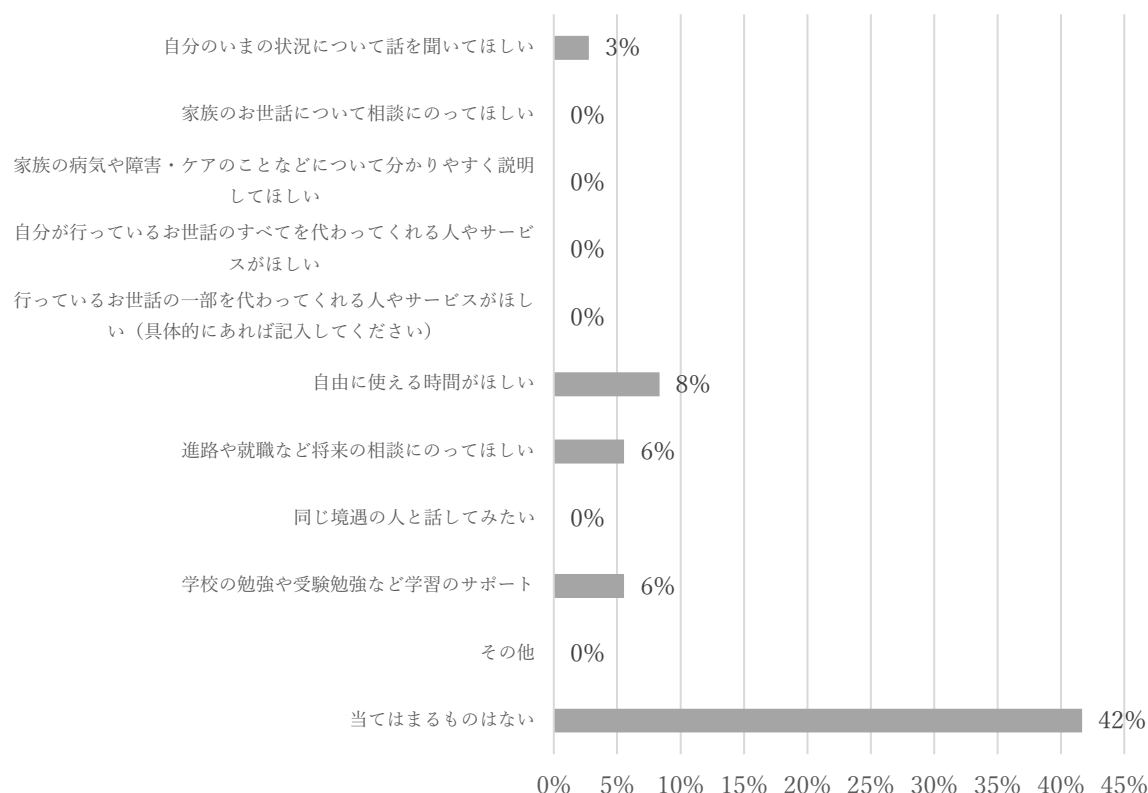
これらの結果から、既存の支援システムの枠組みではケアを担う中高生のニーズに対応できない可能性が考えられる。

図表 3.3.5 どのような支援があったらよいか：中学生（複数回答、総回答数=124）





図表 3.3.6 どのような支援があったらよいか：高校生（複数回答 総回答数=36）



#### 4. 結論

調査の結果から、以下の東大阪市の中高生の生活実態が明らかになった。まず、ヤングケアラーではない生徒も日常生活での 3 割程度ストレスがあり、日常生活でのストレスや困難を抱えている中高生が一定程度いた。また 東大阪市のヤングケアラーと想定される子どもについては、中学生で 97 名、高校生で 23 名おり、全国調査よりも若干割合が高かった。加えて、お世話が必要な人として高齢者の割合が高い（特に中学生）こともこの地域の特徴として明らかになった。

さらに、本調査で独自項目として設定したケアの影響では、ネガティブな面だけでなくポジティブな面もみられた。ただし、ヤングケアラーの当事者である中高生が自分のケアをポジティブに評価しているということは、やりがいを感じているというだけでなく、やりがいがあるから大変でもケアを担い続けてしまうという問題にもつながりうるため、留意が必要である。この点については、今後学業の状況や健康状態との関連を検討したい。

ヤングケアラーの子どもたちの必要な支援については中高生とも「当てはまるものがない」が最大であった。他の設問から日常生活に問題がある中高生は多数存在することが想定されることから、既存の支援のパッケージでは十分に当事者のニーズに対応できるものが

ないことや、困っていることがあっても支援を具体的に想定できない、という可能性が示唆された。

以上の調査成果から、今後の東大阪市におけるヤングケアラー支援制度について述べる。

まず、当該地域の特徴である高齢者介護が多いという点から、福祉サービスとの連携や支援が効果的であると考えられる。ヤングケアラー本人を対象とした支援ではなく、要介護高齢者へのサービス提供を通じて、ケアラーへの負担の軽減を図る。

次に、ヤングケアラー本人への支援策については、現在想定されている支援策へのニーズが低いことや、調査に設定した自治体の相談窓口が利用されなかったことから、日常生活とは切り離されたヤングケアラー向けの支援機関では効果が薄い可能性がある。ヤングケアラー以外の中高生にも一定の割合でストレスや悩みをかかえている子どもたちがいることから、ヤングケアラーに限定せず学校などの日常生活で誰でも気軽に相談できるスクールソーシャルワーカーを窓口として、悩みの内容に応じて他の福祉サービスや学習サービスにつなげていくという方法が考えられる。これは、特定の制度を利用することで生じうるヤングケアラーのスティグマの回避にもつながる。

最後に、本研究の意義を述べる。東大阪市で初めてヤングケアラーについての市立中学校・高等学校の全数調査を実施したことにより、当事者である中高生の日常生活における困難や支援へのつながりにくさという実態を明らかにすることができた。これは、今後の支援策を検討するための基礎資料となりえる。

一方で詳細なデータの分析や、他地域の支援策との比較検討については研究期間中に十分に取り組むことができなかったため、今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究活動にご協力いただいた東大阪市子どもすこやか部・子ども見守り相談センター・子ども相談課および東大阪市教育委員会、市内中学校・高等学校の関係のみなさまに心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

大阪市・大阪市教育委員会・研究チーム 2022 『大阪市立中学校生徒と対象としたヤングケアラー実態調査報告書』（2023年4月10日取得

[https://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/cmsfiles/contents/0000550/550590/4houkoku\\_syo.pdf](https://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/cmsfiles/contents/0000550/550590/4houkoku_syo.pdf))

大阪府 2021 『令和3年度府立高校におけるヤングケアラーに関する調査結果について』（2023年4月10日取得

<https://www.pref.osaka.lg.jp/hodo/index.php?site=fumin&pageId=46169>)

こども家庭庁 2023 「こどもまんなか 子ども家庭庁（公式HP）」（2024年2月10日取得 <https://www.cfa.go.jp/top>)

ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の 連携プロジェクトチーム『ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の 連携プロジェクトチーム報告』(2024 年 2 月 21 日取得 <https://www.mhlw.go.jp/content/000780549.pdf>)

松村智史 2022 「ヤングケアラーに着目する『危うさ』と『契機』——日本社会における家族と社会のケアをめぐって」『SYNODOS』(2024 年 2 月 10 日取得 <https://synodos.jp/opinion/society/28413/>)

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 2021 『令和 2 年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書』(2023 年 10 月 15 日取得 [https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai\\_210412\\_7.pdf](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf))